



Bゼミ

2020/07/02 小嶋

序論

前史

第Ⅰ部

コニーアイランドー空想の世界のテクノロジーー

第Ⅱ部

ユートピアの二重生活ー摩天楼ー

第Ⅲ部

完璧さはどこまで完璧でありうるかーロックフェラー・センターの創造ー

第Ⅳ部

用心シロ！ダリトル・コルビュジエがニューヨークを征服する

第Ⅴ部

死シテノチ（ポストモルテム）

補遺

虚構としての結論

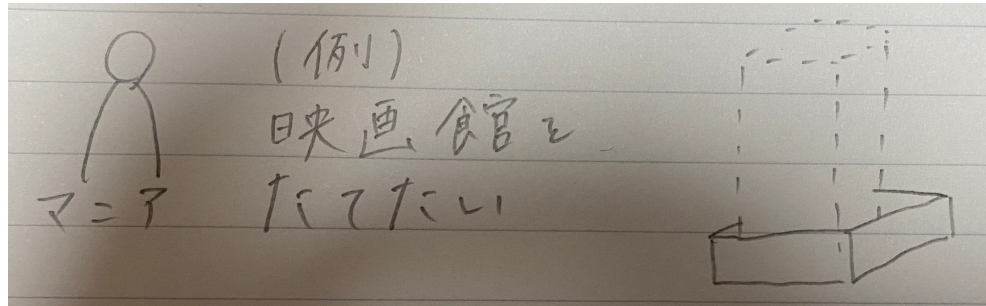
過密の文化

- ・マンハッタンは「世界が絶対的に人間の欲望に一致する点」を目指した。→その結果「過密の文化」が誕生
- ・「隠された第二の議論 (p.486 ㉪)」
→メトロポリスにはメトロポリス固有の特殊な建築が必要。
過密の文化の伝統を新鮮に保ちながら未来へ発展。
マンハッタンだと、グリッド、分裂、曲線など？

囚われの球を持つ都市

①科学・マニアが土台を持つ

②



「理論的仮定」

「存在しない物理的条件」

歓迎されざる法律
否定できない真実

→無視「宙吊り」

③ビルが建てば建つほど②の球体は大きくなる。(無視されることが多くなる?)

④グリッド・ロボットミー・垂直分裂だけでまちが作られていく。
「メトロポリスの領土を建築に取り返してやることができる」

ホテル・スフィンクス、ニューウェルフェア 島、ウェルフェア・パレス・ホテル

共通点

- ・マンハッタンの過密さから**逃げよう**として建てられている。

ホテル・スフィンクス→まちの様々な方向を「見つめる」(p498 ㉞)

ニューウェルフェア島→安全な距離を置いて見ていられる (p.497 ㉟)

ウェルフェア・パレス・ホテル→「逃避」への欲求とその可能性
(p.506 ㊱)



マンハッタンから逃げらる限られた場所で、グリッド・ロボットミー・垂直分裂の三つの基本公理が駆使して、**リゾート地化**している。

プールの物語

フローティングプール（→悲観主義の文化の比喩？）・・・泳ぐ方向と逆方向にプールが進む。

40年にわたって、大西洋を横断し、モスクワからマンハッタンに到着。

ニューヨークの建築家たちはプールのデザインを批判。

来ただけなのに批判されたことに構成主義者は反発？し、

ウェルフェア・パレス・ホテルの正面でメデューサ号と衝突。

→楽天主義と悲観主義衝突。

「鋼鉄のプールはバターにナイフの刃が入るように可塑的な彫刻をすっぽりと切り裂く。」

（プールをグリッドの一つとして自らマンハッタンと一体化させ、批判した文化もマンハッタンに必要であることを体現した？楽天主義を批判？）

疑問点

- ・「これらの瞬間にこそ、この都市の中心部に宙吊りされた囚われた球の目的が明らかになる」 (p.489 ㉑)

→目的とは？

- ・「いずれは誰かがこの漂流プールを発明しなければいけなかった」 (p.510 ㉔)

→その理由は？